原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百四十四号

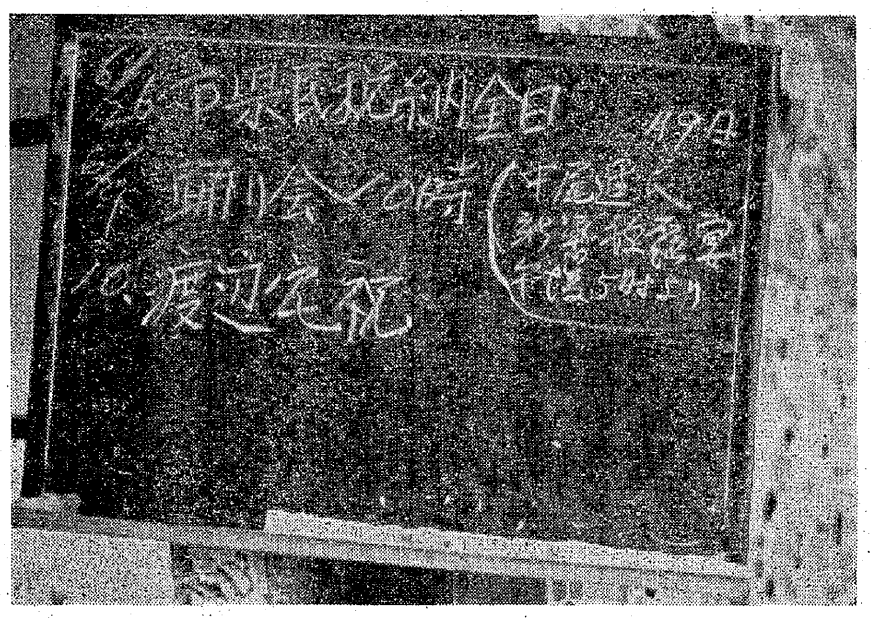
原告団レポート

CO患者――開田晃臣さん

俳句道こそ生き甲斐

人の句と自分の句とを混同しながらも、続ける作句

今のままでよい長生きを……と妻



写真上、居間の片隅にある黒板。忘れないために、何でもちゃんとここに記しておく開田さん。いわばこの黒板が、彼の道案内人。下は、さつきの盆栽を抱いてもらってパチリ。ほとんどの鉢が、盆栽だとはいえないものだが……。

俳句と書と

開田晃臣さんは、奇妙なCO患者である。

労災補償の七級の年金を受給しながら、造成職場の一つ――万田作業所の農園の仕事をしている。陽に体をさらしている割には顔色も白く、容姿すこぶる端正。それに、書に俳句づくりの余技までもつ。

いや書にせよ、俳句にもせよ、余技の域をはるかに卓越して、したたかな腕前である。

彼の俳句道の同人であり、また作句活動の先輩格に当たる人に、大牟田仏教会会長の藤津闡蔵さんがいる。浄土真宗に属する開田家の檀那寺の、大牟田市藤田町の光円寺住職。その藤津さんは、開田さんの作品について語ってくれた。

「書もお書きになるそうですがどうしてどうして、あの人の俳句はもうどこに出しても決して恥かしくないものです。ただどうしたことか、あの人は、とかく自分やあるいは自作のものを、人まえに押し出すことをひどく嫌いますので、そのため折角の評価が広がらないのです」

作句は語る

ここに「昭和五十二年四月より」と記された、一つのちっぽけな彼の句帳がある。

どうしてしまったのかわからないが開田さんは、今着物のポケットにもち歩いている句帳以外にもっている句帳といえば、ただこの一つだけ。さいわい、そのなかから幾つかの作品を拾って見よう。

風つよくなりあめんぼの向き揃う

吾が脚に突き当たりたる蛙かな

樹の裏へ蟬横歩きしてまわる

ことごとく青田の小鮒死んでをり

炎天の雀とばざる刻のあり

田の畦に土龍の泥のふえにけり

蒲草の薬屑を押し上げてをり

風にとびし羽根に蟻喰い付いてをり

右に拾ったどの句も、何という美しさ。動物では小さい蟻やあめんぼ、植物では薬屑を下から押し上げながらけんめいに芽を出そうと格闘している雑草などが主題となっているように、あらゆる生きとし生けるものの命への、ほとばしる彼のいつくしみ。胸をうたれずにはいられない。

もともと彼は、「人間そのものが美しい人」（前記の藤津闡さんの言葉）に違いない。

妻は農業を

そんな彼の人間に打ちこまれた、一酸化炭素中毒――CO中毒症の爪跡は深い。

住まいは、前記の光円寺のすぐそばで大牟田市藤田町二九七番地。代々農家だった。開田さんは昭和二年の十二月五日この家で生まれる。今、五十二歳だ。

妻の美千子さんも彼と同じとし（昭和二年七月十五日生まれ）。二十九年四月十七日に、開田さんの許へ嫁いできた。

すでに坑内機械工として三川鉱の坑底で働いていた彼だったが、家では父親がまだ丈夫で農業を営んでいた。そのため美千子さんは逃がれられず、農業を手伝うことになってしまった。今では特に一家の大黒柱の存在。いつからともなく背負いこんでしまった神経痛を鍼治療で押さえ押さえ、一人で水田三段五畝を耕作している。

「二十四～五俵収穫しますけど耕作機械や農薬、肥料代の支払いなどで果たしてもうけになっていますかどうか」

妻の美千子さんは、そういっては頭をかかえる。

子ども成長

子どもは三人。長女の邦子さんが昭和三十年九月二十八日、次女の敏子さんが同三十三年五月二十七日、ひとり息子の和也さんが、三池闘争のまっただ中の三十五年七月八日それぞれ誕生。今は思い思いの職を選び家から働きに。

人間としても、すっかり成長した。「私がこの気質ですから、ついヤーヤーいってしまいますと、逆に子どもたちから『お母さん、やめんね。ヤーヤーいってどうするね。お父さんはCO患者の七級よ』、とたしなめられます」、と美千子さんが述懐するほどだ。

彼の人間は

妻として添ってきた美千子さんの知る限りは、夫の開田さんは男のなかの男、労働者らしい労働者まったく頼りになる人間だった。

思い出すのが三池闘争のときのこと。闘いのまんなかで、ひとり息子の和也さんを産んだのはよかったものの、まだ産褥にありながら、つい二～三日前に植えつけたばかりの、田んぼのことが気がかりでならなかった。息子誕生と聞いて、闘いの場からかけつけてきた開田さん、元気に泣いている赤ん坊の顔をひと目見ると、すぐ折り返しホッパーへ向かってかけ出していこうとした。

その彼にたまりかねた美千子さん、産褥のなかから「田んぼの水の入れ手もなく、このままでは乾あがってしまう」とすがるのにかけ出していく彼は断固として宣言したという。

「米には、今年ダメなら来年がある。ところが、この闘いには来年はないのだゾ」

そんな開田さんだったからこそ妻の美千子さんもまた、やがて労働者の妻として三池主婦会の運動をささえる一本の柱になることができたのだったが……。

包んだ運命

三池大爆発のあの日、開田さんは、三川鉱の大斜坑（爆発が起きた）坑口に近い泉水の側で、ふらりとつっ立っているところを美千子さんが見つけた。夜なかも午前一時を回っていた頃のことで、見れば彼は汚れたままの素裸のうえに、ただ坑内で着る作業衣をたれかがひっかけてくれたものらしく股ボタンさえはめないままだったという。そのとき彼はも早や、取り返しのつかぬCO中毒におかされていたのである。その翌日の、三井天領病院入院とともに、家族もまたそのなかに包みこみながらCO中毒患者としての彼の運命的な生きざまが始まったのである。

生き地獄

入院して数日、さいわい意識を回復したものの、その意識機能はもう古雑布同様ずたずたに断ち切られてしまっていた。

八歳と五歳と三歳という幼な子たちを、まわりの仲間の家にあずけっ放しでつき添う美千子さんに、今たべたばかりなのに、部屋のたれかがベントウを開けば、「俺にもめしを食わせんか」と目をつりあげた。「今あげたばかりよ」といえば、「いや、俺は食っとらんぞ。やらんか」と困らせるのだった。

便所だというから、ちゃんと便所までつれていって、便器のうえに尻をまくってやってしゃがませ、すんだと思われる頃迎えに行けば、もう便所のどこにも姿は見えなくなっていた。

一方美千子さんが、子どもたちのようすを確かめに家に帰れば、こんどは病院の夫のもとへ立ちもどるにも、泣いてすがりついてくる子どもたちを、心を鬼にしながらふりほどき、走らねばならなかった。「生き地獄でした」、と美千子さんは口をふるわしながらその目がしらを押さえるのである。

変らぬ人間

その後の、三井鉱山や政府（直接には労働省）の余りにもつれない仕打ち、それに対する闘い（特に妻の）、生活の起伏など織り混ぜながら今に至っている彼。

なるほど俳句や書に卓越した力量を発揮している半面、ひどい物忘れが家族の者をハラハラさせている。うつ病を思わせる人嫌いが色濃く陰を投げ、逆に例によっていつ、どんなことで感情が爆発しないとも限らず。すでに「お父さんにチャンネルはまかせよう」と、政治的配慮を見せてくれるまでに成長した子どもたちの思いやりが、あるいはからくも家庭の崩壊を救っているのかも知れない。

でも、物忘れはひどい。この文の初めにふれた彼の句帳に書きこまれた句は、読みすすめば同じ句がくり返しくり返し幾回となく出てくる。すでに成句となって一度は句帳に書きこんだのを忘れ、ひょいと思い起こしてはそのつどくり返し記入したものと見える。現に、彼の同人でまた先輩格でもある、光円寺住職の藤津闡蔵さんが話してくれた。

「あの人の作品は、投句されるとよく選にはいります。ところが『あれ、これは私のだったかな』と、あわてて句帳を広げては自作のものかどうかを確かめることがたびたびで、ときにはよく人の作品と自作のものとを混同してしまったり。人間にこそ変わりはありませんが、昔はとうてい見られなかったことです。でも、昭和二十二～三年以来、ずっと今日まで作句仲間として歩き続け、また作句活動が一面被災後のあの人の人間をいくらかでも呼びもどす力になったことを信じますので、今後もいっしょに歩き続けていきたいと思っています。それに作句活動は今ではきっと、なくてはならない生き甲斐となっているのではないでしょうか」

妻の美千子さんもはいった――

「今のままでよいから、一日でも長生きしてもらわなければ……」

がんばれ、CO患者――開田晃臣さん。